

学術論文

ピールの『アルカザールの戦い』とイングランドのモロッコ外交政策

Peele's *The Battle of Alcazar* and England's Moroccan Foreign Policy

石橋敬太郎*

Keitaro ISHIBASHI

George Peele's *The Battle of Alcazar* was written in 1589. At the time of the play's composition and performances, England was confronted with the danger of a direct invasion from Spain. Confronted with the Spanish threat, England's political and military relationship with Morocco was needed. To establish the relationship between England and Morocco, Queen Elizabeth was carrying on negotiations with Muly Ahmed al-Mansur, Muly Mahamet Seth in the play. This paper illuminates anxieties about England's political and military relationship with Morocco by examining the anti-Moroccan elements of the play in relation to contemporary events in Barbary.

Keywords: *Islam, Morocco, Barbary, Foreign Policy*

イスラム, モロッコ, バーバリー, 外交政策

序

ジョージ・ピール作『アルカザールの戦い』が執筆された時期は1589年頃とされている。本劇の舞台となった歴史上のバーバリーは、チュニス、アルジェヤトリポリを含む北アフリカのオスマン・トルコの摂政管区、および同国の勢力から独立・自治を維持していたモロッコ王国を指す。本劇は、初期近代イングランドの舞台に初めてムーア人を登場させ、王位篡奪者ムレイ・マハメットと彼の叔父ムレイ・アブデルマルクとの王位継承をめぐる争いを取り上げる。実在する当時のモロッコ国王アフマド・アル・マンズール（在位1578年-1603年）が劇中においてムレイ・マハメット・セスとして登場していることもあってか、本劇はたびたび上演されるほど、人気を博した作品であった。

ローズ劇場の経営者で、当時の詳細な上演記録を保存していたフィリップ・ヘンズロウの『日記』によると、本劇は、1592年2月にストレインジ卿一座によってローズ座で初演されたのを皮切りに1593年1月まで13回以上上演された(Henslowe 16-19)¹。ちょうど、世界支配をもくろむ敵国スペインに対抗する措置として、イングランドがモロッコやオスマン・トルコとの軍事的協力を求めている時期のことである。このような国際情勢を背景として、当時の劇場では、ロバート・グリーン作『トルコ皇帝セリマス』(1588)、トマス・キッド作『ソリマンとパーシダ』(1590)などムーア人またはトルコ人と呼ばれるイスラム教徒を描いた作品が次々と上演された(Harrison I: 13-45)。

ところで、ピールの『アルカザールの戦い』に関する批評は数少ない。そのなかで、従来の批評の主なものをもとめると、次のようになる。すなわち、A. R. ブラウンミュラー (A. R. Braunmuller) は、ポルトガル国王ドン・セバスティアンの戦死の原因がスペイン国王フェリペ二世の二枚舌にあったとして、ポルトガル支配をもくろむスペイン国王の測り知れない野望が描かれたとする(67)。G. K. ハンター (G. K. Hunter) は、劇中の登場人物が巻き込まれる「現実政策」のもつれたわなが描出されているとして、ブラウンミュラーの見解をさらに展開する(79)。劇中のポリティックスを論じたブラウンミュラーたちの論考とは別に、ジョナサン・ベイト(Jonathan Bate) は、マハメットが野蛮なムーア人たるニグロとして、またアブデルマルクが勇敢なバーバリーの支配者として表象されていることに着目し、肌の色がムーア人の倫理を規定する記号となっていることを明らかにした(14-15)。確かに、冒頭のプロローグで、プレゼンターは、マハメットを「顔は黒く、行為においては血の色である」("Black in his look and bloody in his deeds")(1 Pro. 16)²と、肌の色と民族性を強調する言葉で紹介する。ベイトの主張は、その後のムーア人に対する批評の方向性を決定づけた。彼らの論考は正しいと思う。

しかしながら、劇中で描かれるバーバリーが、当時のイングランド商人たちがポルトガルやスペインと海上貿易の覇権を求めて争っていた地域であったことも忘れてはならない。この地域は、本劇が執筆された当時のイングランドの貿易市場の推移と絡んで重要な地域となっていた。すなわち、イングランドの海外市場は、1550年を境に織物輸出を中心としたドイツ、低地

¹ ヘンズロウの『日記』では、本劇は *The Battle of Alcazar* ではなく、*mylamvilluco* 等として記録されている。アブデルマルクの別名が Muly Molocco であったことから、*mylamvilluco* 等は一般的に本劇を指すものと考えられている。

² 以下、ピールからの引用および幕場行数すべては、Charles Edelman ed., *The Battle of Alcazar* (Manchester and New York: Manchester UP, 2005) に拠る。

諸国など北ヨーロッパ市場から、輸入貿易に依存するペルシャ、モロッコ、ギニア、トルコ、ロシアや東インド市場に推移した(Brenner 3-5)。この新たに展開した市場から、イングランド商人たちは、香辛料、絹織物、キャラコや宝石類を輸入した。

輸入を求める機運が高まるなかで、イングランド商人の取引相手も、スペイン商人やヴェニス商人などからイスラム商人に取って代わられる。その過程で、バーバリーは、イングランド商人がポルトガルやスペインと海上貿易の覇権を求めて争う地域となったのである。

宗教を傍らにおき、バーバリーを舞台としてイスラム商人との交易を推進するイングランド商人の企業家精神は、イスラム領域におけるイングランドの重商主義、植民地政策の始まりを予感させるものであった(MacLean and Matar 23)。もちろん、歴史上のアルカザールの戦いは、イングランドが直接関与した出来事ではなかった。たとえば、史実ではイングランド人トマス・ストウクリーは、ポルトガル国王セバスティアンとともに参戦するが、もともと彼は、イングランドのためにではなく、北アフリカ支配を夢見るポルトガル国王に徴兵されて、モロッコに遠征したにすぎなかった³。

しかし、劇中においてストウクリーがエリザベス女王賛美を惜しまないセバスティアンの求めに応じて、モロッコに遠征したことは強調されてよいであろう。しかも、バーバリーは、大航海時代の貿易国としてのイングランドの生き残りをかけた生命線のひとつであったはずである。劇中において実在するモロッコ国王とスペイン国王との政治的な駆け引きが描き出されていることも、本劇がモロッコやスペインとの複雑な政治的な駆け引きを繰り広げたイングランド政府の実情を映し出したとも考えられる。

いずれにせよ、モロッコに対するイメージを表現した古典が数少なかった時代、ピールのモロッコの王位継承を舞台とした作品『アルカザールの戦い』は、同国を紹介する大きな試みであったと思われる⁴。そこで、以下においては、本劇を当時のバーバリーを取り巻く国際情勢のなかに位置づけて読み直してみたい。そして、バーバリーがキリスト教世界とイスラム教世界との政治的な駆け引きに開かれた地域であったこと、またイングランドにとって、対スペイン外交上モロッコ国王が軍事的協力を必要とする国王でありながら、必ずしも信用に値しないパートナーであったことを劇中に見出してみる。これらの要素に光を当てるとき、本劇がその後の作品に登場するムーア人——アロン、オセロー、エリエーザーやモロッコ国王など——表象にどのような影響を与えたのかも垣間見えるはずである。

I

歴史上のアルカザールの戦い(1578年8月4日)は、先王ムレイ・アブダラスが継承においては国王の兄弟を優先するという伝統を破って、息子のムレイ・ムハammad(劇中のムレイ・マハメット)に王位を譲渡したことが原因となって発生した。この王位継承を不服とするアブダラスの兄弟ムレイ・アブデルマルクは、オスマン・トルコの支援を得て甥のムハammadから王位を奪う。そして、王位を取り戻すべくムハammadは、北アフリカ征服を夢想するポルトガル国王ドン・セバスティアンとともに、叔父のアブデルマルクと戦った。これがアルカザールの戦いである。

会戦当初、アブデルマルク軍は、ポルトガル軍の火器の力で圧倒されたが、セバスティアンの稚拙な作戦によって勝利を収める。この戦いにおいて、アブデルマルクとムハammadは戦死する。王位を争った彼ら二人の戦死によって、劇中でマハメット・セスとして登場する現モロッコ国王ムハammad・アル・マンスールが王位に就けられる。セバスティアンは、行方不明となったが、捕虜となっていないことから戦死したものとみられている。

本劇の冒頭において、プレゼンターが「これらの出来事を作り物だと言わないで欲しい。これらは真実なのだから」(“Say not these things are feigned, for true they are”)(1 Pro. 30)と観客に訴えているように、本劇は史実をほぼ忠実に再現している。しかしながら、本劇の最大の特徴は、劇中のバーバリーがムーア人のみならず、トルコ人、スペイン人、ポルトガル人やイングランド人など「全世界が見ている前」(“in view of all the world”)(1.1.27)で上演される場として設定されていることである。それというのも、バーバリーは、これらの国々にとって、商取引上、あるいは同盟国を模索する政治的な駆け引きに開かれた場として重要な地域となっていたからである。この全世界が見ている前で、ムレイ・アブデルマルクは、かつてのトルコ人の指導者「アムラス大王」をいかに崇拝しているかを立証するために、甥のサアド朝第4代スルタン、ムレイ・マハammadによって篡奪された王位を取り戻す決意をする。

アムラス大王に言及することで、アブデルマルクは、自身の国王として聖別された地位を確信するとともに、オスマン・トルコとの同盟関係をも明らかにする。トルコのバシャは、アムラスの命令のもと「友人」として、アブデルマルクの国王としての権利と尊厳を守り、「バーバリーの皇帝」とするためにモロッコに到着したことを次のように告げる。

We are not come at Amurath's command

³ この戦いに参加したイングランド人の貢献について、ナビル・マター(Nabil Matar)は、同時代のモロッコの記録や本劇の材源のひとつであるジョン・ポールモンの『戦いの書』第二部に言及されないほど無意味なものであったと述べている(17)。

⁴ ちなみに、同じイスラム教徒であるトルコ人に対するイメージは、ジョン・フォックスの『殉教者の書』(1563)にある「トル

コ史」(371-91)において確立された。このなかで、トルコ人は野蛮で残虐であると述べられている。このイメージに沿って、たとえば、グリーン『トルコ皇帝セリマス』では、セリマスがオスマン・トルコの支配権を獲得するために、父王を毒殺するほか、その兄弟を殺害する経歴が描出されている。劇中では、彼の残虐さとエゴイズムが強調されている。

As mercenary men to serve for pay,
But as sure friends by our great master sent
...
To see thee in thy kingly chair enthroned,
To settle and to seat thee in the same,
To make thee Emperor of this Barbary,
Are come the viceroys and sturdy janissaries
Of Amurath, son to Sultan Solimon.
(I. i. 21-33)

さらに、この場面で重要なことは、現国王マハメットが自身の兄弟と叔父アブデルマルクの兄アブデルムネンを殺害するなど、妻カリボス、息子や護衛の支援を得て王位を篡奪したモロッコの政情が描出されていることである。すなわち、マハメットは徹底的に血に飢えた暴君として登場している。公正で賢明であったとされる歴史上のマハメットに対してエリザベス女王が経済的、政治的な連携を求める書簡を送り続けていたことからすれば(MacLean and Matar 42)、彼の悪党としての表象は史実に反することになる。これをどう考えるかについては後述するが、結果として、アブデルマルクとマハメットとの戦いでは、アブデルマルクが勝利を収め、モロッコの王位に就く。

その際のアブデルマルクの次の台詞は、トルコ人、スペイン人、ポルトガル人やイングランド人など全世界の前でサアド朝モロッコの王位が国王の兄弟に継承される伝統を正当化するとともに、次期国王で、実在する当時のモロッコ国王アフマド・アル・マンスールを体現するムレイ・マハメット・セスの王位の神聖さを強調する。

Lo, lords, in our seat royal to succeed
Our only brother here we do install,
And by the name of Muly Mahamet Seth
Entitle him true heir unto the crown.
Ye gods of heaven gratulate this deed,
That men on earth may therewith stand content.
Lo, thus my due and duties do I pay
To heaven and earth, to gods and Amurath.
(II. i. 16-23)

ここで次にわれわれが問うべきは、なぜ劇作家が実在する国王アフマド・アル・マンスールを登場させたのかということである。この問題を考える上で、イングランドとモロッコとの関係を紐解いてみたい。両国の関係は、長期間に渡るポルトガルのモロッコ支配の崩壊の時期までさかのぼれる。すなわち、1540年代を通して、サアド朝は、北アフリカに位置するサフィとアガディールからポルトガル人を追い払うことに成功し、それによってイングランド人にモロッコ貿易への道を開いたのであった(Brenner 12-13)。1551年にジェイムズ・アルディによって始められたモロッコとの貿易は、砂糖、ナツメヤシの実やアーモ

ンドなどの輸入を通して確立される。そして1570年代になると、両国の関係は、火薬の原料となる硝石の貿易にまで拡大する。

なかでも、硝石の貿易については、アルカザールの戦いの前年にあたる1577年、イングランドの仲買人エドモンド・ホーガンとアブデルマルクとの交渉がクライマックスを迎えていた(Bartels 24)。彼らの交渉の結果、砂糖と硝石の輸入と引き換えに、イングランドは、鎧、弾薬、船舶の材料となる木材、大砲用の金属を輸出することで合意をみた(Bartels 24-25)。ナビル・マター(Nabil Matar)が指摘したように、イングランドの経済を推進し、当時グローバルな市場であった地中海に進出する足がかりは、まさにバーバリーであったように思われる(2)。

この経済的な結びつきは、スペイン勢力を恐れるモロッコ、イングランド両国において政治的にも利用された。その証拠として、イングランド女王エリザベスは、モロッコとの友好関係を求めて、本劇に登場する同国王——ムレイ・マハメット、ムレイ・アブデルマルク、アフマド・アル・マンスール——と交渉を続けていた。当時のイングランド政府にとって、モロッコは外交政策上必要とされる王国であったのである。このことが、劇作家の関心を実在するモロッコ国王に向けさせたと考えられる。もうひとつ注目したいのは、劇中においてバーバリーが同盟関係と取引次第で地中海支配を左右する政治的な駆け引きの場として開かれていることである。

II

劇中のバーバリーの持つ政治性は、モロッコの王位継承という地方的なものから、スペイン、ポルトガルによる政治的介入へとグローバルに拡大する。すなわち、叔父ムレイ・アブデルマルクによって王位を奪われたムレイ・マハメットは、事態を解決すべく仇敵のポルトガル国王ドン・セバスティアンに王位回復のための支援を求める。その条件として、マハメットは、セバスティアンにモロッコ王国を譲渡し、朝貢を納めるほか、自身がフェスの王となることに満足するとの書簡を送った。このとき、セバスティアンはモロッコ遠征を「神聖なキリスト教徒の戦争」(“holy Christian war”)(II. iv. 66)にたとえる。

そして、この戦いが福音書の教えに従っていることを確信して、セバスティアンは、ムレイ・アブデルマルクとアムラスをポルトガルの力に震えさせ、北アフリカにキリスト教を植えつけるためにアルカザールの戦いを利用する。次のように述べるセバスティアンのもくろみは、バーバリーをマハメット復位のための戦いからキリスト教支配の政治的な場として変容させていることを示している。

That course will we direct for Barbary.
Follow me, lords, Sebastian leads the way
To plant the Christian faith in Africa.
(II. ii. 163-165)

グローバルな変化および取引次第で政治的な駆引きに開かれた場としてのバーバリーを観客に示そうとする劇作家の意図は、イングランド人トマス・ストックリーを劇中に登場させることでも明らかになる。この人物は、スペイン国王フェリペ二世や教皇グレゴリウス七世に仕え、アイルランドにカトリック教を復活させて、国王になるのを夢見るイングランドで最初のグローバルな人物として登場する(Lockey 3-32)。

しかし、アイルランドに向かう途中、悪天候によりリスボンに到着したストックリーは、セバスティアンから北アフリカ遠征を求められる。ここでセバスティアンがとった手段として強調したいのは、彼がエリザベス女王のアイルランドの権利を是認し、彼女の王位を天と神にかしづかれた神聖なものとして最大限に称賛していることである。彼によると、女王によって強固に守られているアイルランドは侵略に適さない。これらの言葉によって、ストックリーは北アフリカ遠征に応じる⁵。

エリザベス女王に対するセバスティアンのまなざしは、バーバリーがイングランドにとって決して無関係ではないことを物語っている。それどころか、アーヴィング・リブナー(Irving Ribner)が指摘したように、エリザベスがセバスティアンと同じアヴィス家のドン・アントニオによるポルトガル王位要求を積極的に支援していたことを思い出すとき、彼のエリザベス賛美は、バーバリーをよりリアルな地域として観客に訴えたことであろう(198)。すなわち、ピールが本劇を執筆していたとされた時期、イングランドにとって、ポルトガルはスペインからの威嚇を阻止するのに必要な同盟国であったのである⁶。

しかも、セバスティアンがフェリペ二世に援軍を要請することで、バーバリーが地中海支配をもくろむキリスト教国の政治的な舞台として描出されていることも注目し得る。後に続く場面において、ポルトガルの名声を拡大させ、北アフリカにキリスト教を広めようとするセバスティアンの目的を達成させるために、フェリペ二世は、彼に援軍を約束するほか、娘イザベルとの結婚とモロッカ諸島の称号の譲渡を申し出る。

しかし、三幕のプロローグで観客は、フェリペ二世の裏切りを知らされているため、マハメットの復位をめぐるセバスティアンの北アフリカ遠征がスペインのポルトガル支配にすり替えられてしまうのを目の当たりにすることになる。アブデルマルクやストックリーがスペインの二枚舌を見抜いていることも、本劇におけるバーバリーが同盟と取引次第で左右されるリアルな政治的な駆引きの場であることをイングランド人に伝えるはたらきをしている。

⁵ スtockリーは、カトリック、海賊、そしてイングランドの明らかな敵であったにもかかわらず、その勇氣、野心とエネルギーによって死後間もなく人気のある英雄となっていた。これを裏付けるかのように、1596年に作者不詳『將軍トマス・ストックリーの有名な生涯』が執筆・上演された。またトマス・ヘイウッドは、『私をご存じなければ、どなたもご存じない』第二部(1603-5)のなかで、ストックリーを「国王に似つかわしい精神をもち、戦争においてイングランドに名誉を与え、生涯を

III

それ以上に見逃せないのが、アルカザールの戦いを前にしたアブデルマルクのスペインに対する姿勢である。前に、あれほどオスマン・トルコとの同盟関係を基盤としたサアド朝モロッコの支配構造を観客に植えつけたはずの彼は、たとえフェリペ二世のセバスティアンに対する約束が事実だとしても、交渉次第ではスペインを味方につけられると言う。次の引用に見られるように、彼はすでにスペイン国王にポルトガル国王を支援しないよう求める書簡を送っている。

As for the aid of Spain whereof they hoped,
We have dispatched our letters to their prince
To crave that in a quarrel so unjust,
He that entitled is the Catholic king
Would not assist a careless Christian prince.
(III. ii. 12-16)

そしてアブデルマルクは、フェリペ二世にいくつかの要塞を与えることによって、彼を味方につけようとする。フェリペ二世にしても、「アムラスの恐ろしい侵略から身を守るための突然の恐怖と不安」(“a sudden fear and care, to keep / His own from Amurath's fierce invasion”)(III. iii.37-38)からポルトガル支援を放棄する。結果として、セバスティアンは、カディスでフェリペ二世からの援軍を待つが、完全に裏切られてしまう。スペインとモロッコとの協力関係は、バーバリーを舞台としたキリスト教徒、イスラム教徒双方の「力」のバランスが決定づけられているとも言え換えられよう。

アルカザールの戦いでは、最初、ポルトガルと手を組んだマハメットが優勢となり、アブデルマルクは戦死する。この戦いにおいて、セバスティアンとともに戦っていたストックリーは、二人のイタリア人に殺害される。最終的に、アブデルマルク軍が勝利を収める。この勝利の後で、アブデルマルクの部下ザレオは、現モロッコ国王アフマド・アル・マンスールを体現する王弟マハメット・セスを王位継承者と宣言し、恭しく王冠を彼に差し出す。そして新国王は、味方の兵士が運んできた王位篡奪者マハメットの死体の前で居丈高に勝ち誇る。

Zareo, give this man a rich reward,
And thank'd be the god of just revenge

全うした、あの名声あるイングランド人」(“that renowned Englishman, / That had a spirit equal with a king. . . in warlike strife, / Honored his country, and concluded life”)(293)と絶賛している。

⁶ 事実、サー・フランシス・ドレイクとサー・ジョン・ノリスは、ポルトガル王位を追われたドン・アントニオの代わりに、スペイン支配から立ち上がるようポルトガル人を説得するために同国に遠征している。

That he hath given our foe into our hands,
Beastly, unarmed, slavish, full of shame.

(Vi. 233-36)

劇中のマハメット・セスの圧倒的な軍事的な力量や政治的な洞察力は、当時の観客に対して、現モロッコ国王アフマド・アル・マンスールのを誇示する上で都合がよかったように思われる。すなわち、この場面は、アル・マンスールとの軍事的な同盟を求めるエリザベス女王の政策を支持する形になっているのである。史実では、アブデルマルクを継承したアル・マンスールのもとで、サアド朝は全盛期を迎えることになる。

ところが、アル・マンスールの国王としての権威と政治的能力を保証するテキストのなかに、その読みを不安定にする瞬間がある。それは、前に触れたように、劇中において将来のモロッコとスペインとの政治的協力関係が暗示されていることである。この両国間の関係構築が意味するところを考える上で、歴史上のモロッコの外交政策に目を向ける必要がある。なかでも、先王アブデルマルクがスペインとオスマン・トルコ両国に友好を約束することで王国内の安全を確保することに腐心していたことは注目に値する(Edelman 32)。すなわち、劇中のアブデルマルクの外交政策は、このあたりの事情を映し出している。そして、アブデルマルクの対スペイン政策がマハメット・セスに踏襲されることは容易に推測できる。事実、本劇が執筆された時期のアル・マンスールは、エリザベス女王によるモロッコとの協定締結案を巧みに拒絶しつつ、スペインとの友好関係を維持し続けたからである。

このような政治的文脈を背景とすると、アブデルマルクが求めるスペインやオスマン・トルコとの友好政策は、にわかにイングランド政府がもくろむモロッコとの軍事的協力関係を疑わしいものに思わせてしまう。少なくとも、当時の国王秘書長官サー・ロバート・セシルは、モロッコ王国と軍事的協力関係を結ぶことに必ずしも前向きでなかった節もある(Edelman 33)。冒頭の場面で、エリザベス女王が交渉を続けたムレイ・マハメットが残虐で裏切りに満ちたニグロとして表象されていたことも忘れてはならない。アルカザールの戦いにおいて、敗戦が濃厚になったとき、マハメットは、セバスティアンを裏切って逃亡する。

悪党としてのマハメット表象は、モロッコ国王が信用に値しない国王であることを強く印象づける補助線となっていたのである。史実では、この戦いでセバスティアンが行方不明になっ

たことによって、ポルトガルの王位は、彼の摂政であった大叔父の枢機卿ドン・エンリケに継承されるものの、独身で世継ぎのなかった彼の死後の1580年に、スペイン国王フェリペ二世に奪い取られる。本劇が上演されたのは、エリザベス女王がスペインやギーズ家を指導者とするカトリック同盟を敵にまわしたアンリ四世を支援するために多額の資金と援軍をフランスに送ったが、功を奏さなかった時期でもあった。

IV

フランス沿岸に足がかりを得たスペインは、再びイングランドを侵攻しようとする。こうした緊迫した状況のなかで、スペインの脅威を払拭するために、エリザベス女王がモロッコやオスマン・トルコとの同盟を求めたのは、自然の成り行きであった⁷。しかし、当時の観客に対して、劇作家がバーバリーを従来以上にスペインとモロッコとの政治的な駆引きに開かれた地域として、またその中心にムーア人が関与していることを認識させるのに十分であったように思われる。

従って、ピールが『アルカザールの戦い』のなかで描出したバーバリーは、モロッコやスペインとの複雑な政治的駆引きを展開したイングランド政府の実情を反映していたと考えられる。さらに、1590年代に入ると、モロッコは、スペインと露骨に手を組み、同じイスラム教徒でありながら、オスマン・トルコ支配に不満を抱き反乱を起こすバーバリーを標的にして、トルコを敵にまわす挑発を始める⁸。その際に、アル・マンスールは、オスマン・トルコの侵攻に備えてフェスやアルジェリア付近にある町の城壁を強化するなど、対抗措置を講じていた。こうした政治的文脈を背景とすると、劇中においてどんなにマハメット・セスがセバスティアンの葬儀を厳かに行い、その死体をポルトガルに帰すと約束しても、乾いた響きしか与えない。

And now, my lords, for this Christian king:
My lord Zareo, let it be your charge,
To see the soldiers tread a solemn march,
Trailing their pikes and ensigns on the ground,
So to perform the prince's funerals.

(V. i. 256-260)

しかも、セバスティアンの死の場面は舞台上で示されないことから、デイヴィッド・ブラッドリー(David Bradley)は、「アフ

⁷ オスマン・トルコとイングランドの協力関係については、『アルカザールの戦い』が上演された1592年、エリザベス女王がトルコ皇帝ムラト三世にスペインを攻撃するように説得する準備を整えていたことからうかがえる。しかしながら、この政策に対して、サー・アンソニー・シャーレイなどオスマン・トルコを信用に値しないとする人々もいた(Sales 85)。また、ジェイン・グローガン(Jane Grogan)によると、シャーレイは、後にエセックス伯の求めに応じてペルシャに渡り、オスマン・トル

コを打ち倒すためにペルシャとキリスト教国との同盟をペルシャ皇帝シャー・アバスに提案するまでに至る(152)。

⁸ この頃、スペインとオスマン・トルコとの休戦協定が成立していた。この協定によって、世界支配をもくろむスペインにとって、オスマン摂政管区でのモロッコ人の反乱が有利にはたっていたことは明らかであろう。最終的に1602年10月、モロッコは、大敵トルコに対抗するため、スペインとの軍事協力を締結した(MacLean and Matar 59)。

リカでトム・ストウックリーの巡礼の旅が終わった」(“Here [Africa] ends Tom Stukeley’s pilgrimage”)(V.i. 180) という最期のストウックリーの言葉をセバスティアンのそれであるとする。ブラッドリーによると、この場面において、ストウックリーの生き写しとなったセバスティアンは、北アフリカから各国を転々と移動して、再び自国に現れるというポルトガルの伝説を喚起する役割を果たしている(170)。セバスチャン復活のうわさがイングランドに伝わり始めていたことからすると、この劇はバーバリーに生じている国際情勢を繰り返し観客に訴えていることになる。

もちろん、ピールが当時のバーバリーの政情およびポルトガル国王復活の伝説を意識して作劇したという証拠はない。しかし、1588年のアルマダ撃滅後、地中海および近隣諸国との複雑な国際情勢とあいまって、対スペイン政策上、イングランドがモロッコとの軍事的協力関係の構築を急いでいたことは事実である。ちょうどそのとき、アブデルマルクやマハメット・セスのオスマン・トルコやスペインとの協力関係を背景としたアルカザールの戦いが執筆・上演されたのは、イングランド政府の対モロッコ外交に対する不安を表すためであったと考えられるであろう。劇作家は、モロッコを必ずしも信用に値しないパートナーとして示したかったのではなかろうか。

その証拠として、本劇は、1592年から93年にかけて上演された後、1600年にバーバリーの使節団がスペインの世界征服に対抗する目的でイングランドとモロッコとの軍事的な同盟を求めて、国王の使節ムハマド・アル・アンヌーリに導かれてエリザベス宮廷を訪問したとき(Brotton 259)、海軍卿一座によってフォーチュン座で再演されたことが挙げられる(Edelman 33)。このときの使節団が外交とは名ばかりで、イングランドとの商取引に対する情報収集が目的ではなかったのかと、イングランド人が懐疑的にとらえていたことも(Harrison III:123)、モロッコに対するイングランド人の感情を伝えてくれる。

そして、ピールの作品に描き出された野蛮なニグロ、あるいはイングランドにとって必ずしも信用に値しないパートナーとしてのモロッコ国王ひいてはムーア人表象は、後の作品に登場するムーア人に継承される。たとえば、ウィリアム・シェイクスピア作『タイタス・アンドロニカス』(1593-94)に登場する血に飢えた悪党アーロン、『ヴェニスの商人』(1596-97)においてポーシャ求婚に失敗するモロッコ国王や『オセロー』(1603)で嫉妬から妻デズデモナを殺害したオセロー、トマス・デッカー作『欲望の支配、あるいは淫らな王妃』(1600)において情欲と計略によってスペイン王位を狙うフェスの王子エリエザーなどの人物造型に、ピールのムーア人表象の影響が見て取れる。

いずれにしても、イングランドとモロッコとの軍事的な同盟を求める政策は、1596年にエリザベス女王がイングランドに居住するムーア人の増加に対して枢密院に対応を迫り、彼らの国外追放を命じたことから翳りを見せ始める(Harrison II: 109, 111)。そして、女王の王位を継承したジェームズ一世が1604年にスペインとの和平条約を締結したことにより、モロッコとの軍事的

な協力関係は終焉を迎える。その結果、彼の治世においてイスラム世界を描いた演劇作品——ウィリアム・ダボーン作『トルコ化したキリスト教徒』(1612)、トマス・ゴフ作『荒れ狂うトルコ人』(1618)やフィリップ・マッシンジャー作『背教者』(1622)など——は新たな相貌を見せる。すなわち、イスラム教に改宗したキリスト教徒、あるいはイスラム教に改宗したキリスト教徒が再びキリスト教に改宗するという宗教的な問題がクローズアップされることになる(Vitkus 23-43)。

*本稿は、平成29年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究(c)）（課題番号：17K02532）の成果の一部である。

Works Cited

- Bate, Jonathan. “Othello and Other-Turning Turk: the Subtleties of Shakespeare’s Treatment of Islam.” *Times Literary Supplement* 19, 14-15, October 2001.
- Bartels, Emily C. *Speaking of the Moor from Alcazar to Othello*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2008.
- Bradley, David. *From Text to Performance in the Elizabethan Theatre: Preparing the Play for the Stage*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Braunmuller, A. R. *George Peele*. Boston: Twayne Publishers, 1983.
- Brenner, Robert. *Merchants and Revolution: Commercial Change, Political Conflict, and London’s Overseas Traders, 1550-1653*. Princeton: Princeton UP, 1993.
- Brotton, Jerry. *The Sultan and the Queen: The Untold Story of Elizabeth and Islam*. New York: Viking, 2016.
- Edelman, Charles ed. *The Battle of Alcazar*. Manchester and New York: Manchester UP, 2005.
- Foxe, John. *The Acts and Monuments of the Church Containing the History and Sufferings of the Martyrs*. Part 1. London: Charterhouse Square, 1838.
- Grogan, Jane. *The Persian Empire in English Renaissance Writing, 1549-1622*. Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan, 2014.
- Harrison, G. B. *Elizabethan and Jacobean Journals 1591-1610*. Vol. I, II, and III. London and New York: Routledge, 1999.
- Henslowe, Philip. *Henslowe’s Diary*. Second Edition. Ed. R. A. Foakes. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- Heywood, Thomas. *The Second Part of If You Know Not Me, You Know No Body*. In *the Dramatic Works of Thomas Heywood*. Vol. I. New York: Russell & Russell, 1964.
- Hunter, G. K. *English Drama 1586-1642: The Age of Shakespeare*. Oxford: Clarendon P, 1997.
- Lockey, Brian C. “Elizabethan Cosmopolitan: Captain Thomas Stukeley in the Court of Dom Sebastian.” *English Literary Renaissance*, vol. 40, No. 1, 3-32, 2010.
- MacLean, Gerald and Nabil Matar. *Britain and the Islamic World, 1558-1713*. Oxford: Oxford UP, 2011.

- Matar, Nabil. *Britain and Barbary, 1589-1689*. Gainesville: UP of Florida, 2005.
- Sales, Roger. *Christopher Marlowe*. Houndmills: Macmillan Education Ltd., 1991.
- Ribner, Irving. *The English History Play in the Age of Shakespeare*. Princeton, New Jersey: Princeton UP, 1957.
- Vitkus, Daniel. *Three Turk Plays from Early Modern England*. New York: Columbia UP, 2000.